

第14回「学ぶ土台づくり」推進連絡会議 意見交換内容（委員発言要旨）

【開催日時】 平成30年11月21日（水） 午後3時から午後4時25分まで

【開催場所】 宮城県行政庁舎 4階 特別会議室（仙台市青葉区本町3-8-1）

【意見交換】

★ 「幼児教育と小学校教育の接続に係る現状と課題」について（資料3）	
石井委員	<p>○ 国公立幼稚園・こども園協議会独自で行っている「平成30年度幼稚園教育の当面する課題に関する調査」の中で、「幼小連携を行っていますか」との質問に対し、77園全てで「行っている」と回答し、昨年度の96%から100%となり、各園一生懸命取り組んでいる様子。</p> <p>○ 「行っていると回答した園では、どのような連携を行っていますか」との質問に対し、「入学する園児（幼児）の引き継ぎ（申し送り）を行っている」との回答が100%、「幼児と児童が行事や活動に参加したり、見学したりする機会を設けている」との回答が93%と、こちらもかなり高い数値と思う。「職員同士が互いに参観する機会を設けている」との回答は77%、「アプローチカリキュラム等の指導計画を作成し、実施している」との回答は46%で、昨年度はまだ20%だったものが、徐々に上がってきてはいる。「その他」の18%については、合同の研修会の開催などが挙げられている。</p> <p>○ これらの現状に対して</p> <ul style="list-style-type: none">・交流会では、小学校との日程調整、交流の移手段に課題がある。・学区が広域のため交流できる学校が限られている。・打合せ時間の確保や実施した交流の反省や改善について話し合う時間が取れない。・就学児童の引き継ぎをしているが、相互の保育・教育内容の理解や現状の把握までに至っていない。・研修会の職員の参加が難しい（幼保一元化施設のため長時間の保育をしている子供もおり、研修に行くのが難しい）。・アプローチカリキュラム作成の手順などの方法がまだよく分からない。・小学校との連絡協議会など組織化すれば全体への理解も進むと思うが動き出せない。どちらからどのようにしていけばよいのかいろいろアドバイスを頂きたい。・アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムの共有のための時間と場の確保。 <p>といった課題が挙げられている。</p>

吉岡委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 今話のあった国公立幼稚園の状況は、仙台市よりは進んでいるのだろうなと感じた。アプローチ・スタートカリキュラムがどのような形であればいいのか、音頭取りは誰がするのかなど、上手くいっている事例を考えたとき、ほとんどは県教育委員会がシグナルを出しているもの。シグナルがないと、私立の場合は誰に問いかけたらいいいのかとなり、進まない。校長が替わっただけで雰囲気は全然違ってくる。幼児期の姿の捉え方が校長次第で変わってくるのがすごく残念。1年生担任の先生は、やりたいと思ってもやれないというのが現状かなと思っている。 ○ 私立の弱みの話をしているが、子供の育ちというのは私立に預けているから、公立に預けているからということではないと、県教育委員会でシグナルを出すような、そんな接続カリキュラムを期待したい。 ○ 情報交換ができていているという場合の情報というのは、小学校で知りたいと思っている情報であって、幼稚園・保育所の姿の情報交換はできていない。不十分となっている状況を理解していただきたい。 ○ 接続カリキュラムには、先生方の交流、子供たちの理解といった部分も入るべきと思う。全体で考えると、まだまだ接続に関する取組が薄いというのが仙台市の現状。
中鉢委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 資料3では全体の話に記載しているので、所属園のある多賀城市について具体的な話をすると、保幼小連携として何年か取組を続けており、市内の認可保育所15施設（公立5私立10）、認定こども園1施設、児童発達支援センター1施設、幼稚園6施設、小学校6校、これらが年4回情報交換をし、学校教員が保育所・幼稚園を訪問している。秋には就学予定児が小学校を訪問し、校内見学や教員の話聞き、1年生の授業を見学している。1月～2月にかけて、教員が集まり、分科会を設けて情報交換をしている。 ○ 一番課題となっているのが、新しい保育所保育指針が平成30年度から施行され、保育所の児童保育要録について、中身を改善し、修了までに育て欲しい10の姿も踏まえ、市役所を中心に公立・私立保育所とで作成中である。子供の育ちを支えるための資料として、小学校に送りたいと考えている。
新山委員	<ul style="list-style-type: none"> ○ 大河原教育事務所管内には保幼小連携の取組が進んでいる市町があり、大河原町でも先進の取組を参考にしながら、スタートカリキュラムを作成する必要があり、昨年度末からそれぞれの学校独自で取り組んでいる状況。 ○ 本校（大河原南小学校）では、夏休みまでにある程度の形で作成したが、使いにくいという話もあった。 ○ これまで1年生を担当している教員は4月中の細かな日程は教科の指導によらず、小学校の生活に慣れるため、学習のガイダンスとして、保護者にこんな生活をしますよと安心してもらうための細かな予定表を渡していた。その内容を膨らます形で作り替えるよう、現在作成しているところ。 ○ 作りながら思ったこととして、小学校の方では、幼稚園や保育所での体験・経験・学びの視点が欠けていたのではないかと反省点が出され、幼稚園・保育所の先生方からいただく活動の状況を盛り込んでいく方向性になっている。

新山委員	<p>○ 情報交換というと、年度末なので小学校で知りたい内容ばかりだが、スタートカリキュラム作成においては、幼稚園や保育所での活動体験を知りたい、どんなことを経験してきているのかを知りたいという話を、先日の幼小接続カリキュラム作成会議でも申し上げた。形を作るだけでなく、生かされる必要があるので、来年度4月から使えるようにしていかなければならないと考えている。</p>
我妻委員	<p>○ 資料を見て思ったこととして、情報交換の内容は具体的にはどういったことを言うのだろうかということ。地域によってもいろいろ違うと思うが、小学校に入る際の、幼稚園や保育所からの就学時の情報提供だけになっているところもあれば、保育所・幼稚園・保健センター・小学校が集まって定期的に話をしているということもあって、その差がかなりある。</p> <p>○ 同じレベルに持っていくには、県が見本として、こんな例でやっていくのはどうかという案を作ってもらえるとよいと思う。きっかけになるようなことと、具体的な内容をもう少し全体に周知していけば、より具体的な情報交換ができるのではないか。</p> <p>○ 資料3で誤解を与えるような書き方をしてしまったが、「特に幼児と小学生の接続という視点では、見ていないと思われる」というのは、全く関係ないということではなく、児童館・放課後児童クラブの立場として、幼稚園・保育所や小学校教諭との情報交換はするが、幼児から小学生への接続といった部分までは考えていないところも多いのではないかという意味であって、関心がないということではない。</p> <p>○ 情報交換もその年その年によって状況が異なり、こちらから毎年情報交換をしたいと案を出していても、是非やりましょうという年もあれば、何度アプローチしても全く情報交換できなかった年もあり、「そちらで知りたい子供のことだけ教えます」というときもある。毎年状況の違いにこちら戸惑いがある。情報交換の際の見本のようなものがあればよいと思うので、検討願いたい。</p>
田村委員	<p>○ 保護者の意見としてできるお話をしたい。幼稚園では、懇談会などで先生方から小学校に向けての話を聞く機会があり、早寝・早起き・朝ごはんが大事であるという話を聞く。小学校に向けて、こういったものがあつた方がよいなど、県から文書等で示してもらえると、保護者も分かりやすく、子供たちによいとされていることを意識的に取り組めるのではないかと思う。</p> <p>○ 子供が小学校に入る前の段階での、上の子がいる母親と初めての母親では意識の違いがあり、初めての母親の方がすごく不安があつて、早く起こさなければいけない、これをさせなければいけないと、気持ちばかり焦っているように思う。小学校や幼稚園の方で、あまりこうしなさいという示し方では、保護者も子供にこうさせないといけないと感じ、子供を苦しくさせてしまうのはよくないと思うが、ルルブルのようなポスターがあつたことで、小学生になってからはこういうものがあるのだと、親も初めて知つて、子供もシールを貼ることで、遊ぶのはよいことなのだという意識を持つたのはすごく大きかつたと思う。</p>

田村委員	<p>○ 小学校の懇談会に出席していると、幼稚園と違い、出席者が少なく、仕事をされているなど各家庭の事情もあるかと思うが、折角有意義な学校の話を通じて直接聞ける機会なのに、すごく残念に感じる事が多くあった。</p>
遠山委員	<p>○ 塩竈市では平成29年度から小中一貫教育に取り組んでおり、その中で塩竈市幼保小連携事業を大きな柱として実施している。市の大きな教育課題として学力不振と不登校問題を抱えており、平成24年度に本県の中学校での不登校出現率が全国で最も高かったときに、宮城県内でその出現率が最も高かったのが本市であり、大きな課題として捉えていた。</p> <p>○ 要因を考えたときに、学校教育の課題もある一方、大きくは社会経済的な背景、市内の保護者の方々の経済的な状況が大変なのだろうと考えていたが、調査したところ、一人親家庭が全体の18%、中学校では25%の学校もあった。要保護・準要保護の家庭も20%を超えており、先ほどのアンケートにもなかなか回答できない家庭がたくさんあるというのが本市の現状であった。</p> <p>○ 家庭教育に課題を抱えた地域ではあるが、それを学校教育でどこまでカバーできるかという観点で、総合的な教育施策に取り組もうということで小中一貫教育を進めている。キーワードを「活躍」と「交流」とし、授業の中でも子供たちを活躍・交流させて、肯定感を上げるような取組であり、テーマは「一人も見捨てない」としている。</p> <p>○ その中で、小学校と中学校の連携を図るための相互の乗り入れ事業をやっているが、その最もベースとなる小学校1年生の状況をみたときに、落ち着いて話が聞けなかったり、立って歩いたりといった子供たちが多くおり、発達障害の子供もいるという状況もあったので、9年間のスタートの部分をしっかり取り組む必要性を感じ、幼保小連携事業に取り組んできた。</p> <p>○ 大きく2点取り組んでおり、1点は「アプローチカリキュラム」「スタートカリキュラム」である。平成28年度頃から、埼玉県入間市で作成しているものをモデルに、小学校の先生方と、幼稚園・保育所の代表の方に集ってもらい、モデルを見ながら本市で使えるものは何か議論し、1年間に4～5回の会合により作成した。さらに、作成したものを実際に活用してもらい、その結果を踏まえ改訂を繰り返し、改善を図っている。</p> <p>○ もう1点としては、特別支援教育スーパーバイザーというものを置いており、特別支援学校を退職した教員を市で採用し、幼稚園・保育所をまわり、様々な相談に乗っている。当初は押しかけて行って門前払いされるのではないかと心配していたが、実際は全く逆で、小学校と同じ悩みを各園・所でも抱えているということが分かった。</p> <p>○ このスーパーバイザーが、アプローチ・スタートカリキュラムについても、使った感想を各園に聞き取りしながら歩いているというも大きく、カリキュラムがしっかり活用されている一助となっており、幼稚園等では初任者研修にも使われるなど、好評を得ている。</p>

遠山委員	<p>○ 今まで取組は進めているものの、保幼小全体の体制は存在しなかったので、平成30年度からは県の「学ぶ土台づくり」市町村モデル事業の委託を受け、新たに体制整備を進めている。幼稚園や保育所、小学校の縦横の連携を深めるための協議会を年に数回開き、現状の確認等をしていきたいと考えている。教育や保育の質の向上といったところで、それぞれ共通の悩みを持っているので、先生方が集まっての研修の場が設けられないか、考えているところ。</p> <p>○ 学力向上対策でも、「協働的な学びの授業づくり」という事業を平成30年度から取り組んでおり、教員一人が一斉授業するのではなく、子供たち同士が学びに向かう力を身につける、4人グループでの学び合いといった取組を行っている。その中に幼稚園や保育所の先生方に来てもらい、実際小学校でどういった授業をしているのか見てもらうとともに、教員相互の交流も図りたいと考えている。また、まだまだ幼稚園や保育所と小学校の子供たちの交流が進んでいないので、今後考えていきたい。</p>
太田委員	<p>○ 幼稚園と保育園を一体で運営している学校の理事をしており、隣接の小学校と連携し、運動会をはじめ、様々な催し物を通じて子供たちの交流を図っている。特に、小学校への入学を控える年長児にとっては、1日入学の体験はとても効果的であり、教職員の方々も常に交流し、とてもよいことだと思う。</p> <p>○ 資料1-1のアンケート結果を見て、数値を出さなければならないのは分かるが、これで本当に改善になるのかということが一番気になる。資料1-2（目標指標一覧表）の目標2「基本的生活習慣の確立」で、「子どもが『午後9時頃までに就寝する』と答えた保護者の割合」について、目標を一度も達成していない。特に平成30年度は34.9%と、対前年度で12.1%も減少となっている。これをどう引き上げていくのか、具体的に改善していかなければならない。</p> <p>○ 「早寝早起き朝ごはん実行委員会 in 宮城」では、朝のゴミ拾いをしており、3歳児から4歳児を含め、小学校低学年の子供たちも参加している。早く起きて、ゴミを拾って、おいしいものを食べよう、こんなことからスタートしているが、これが全域に広がれば嬉しいと思っている。</p>
川島座長	<p>○ 全体として、やはりアプローチ・スタートカリキュラムという概念があっても、それがきちっと個々を適用できていないという問題点が指摘されているかと思うが、県としてあるべきカリキュラムの姿があるのかどうか聞きたい。また、それを幼稚園等や小学校に伝える努力をしていただきたい。</p> <p>○ 5W1Hを明確にし、県の考えを伝えてもらいたい。やさしいところでは、 「When」いつやることを想定しているのか 「Who」当事者は誰なのか、幼稚園等や小学校の教員だけに任せるのか、サポートが入ることを前提としているのか 「Where」どこでやるのか、どこを使ってやったらいいのか 「Why」は既にお互い共有されていると思う 一番問題になるのは、 「What」何を情報交換すべきと県として考えているのか 「How」それをどのような手段で双方向に伝えるべきと考えているのか</p>

川島座長	<p>今回様々な施策に沿って上手くいっている例も資料として出ており、それらの状況を俯瞰した上で、県として保幼小連携における5W1Hの望ましい姿があれば、聞かせてもらいたい。それを我々がそれぞれの立場で消化した上で、どのように伝えていくのか、本当に効果的かどうかというところを今後見ていくという構成にしたい。</p>
佐々木教育企画室長	<p>○ 一つのきっかけとして、接続期カリキュラムの県内展開があるかと思う。「学ぶ土台づくり」の取組で元気いっぱい育った子供たちが小学校以降の「志教育」に繋がっていくイメージを想定している。このようにやってくださいという内容ではなく、どんなことに気をつけて、どんな情報を集めればよいのか、留意点をまとめる手引書のような形が望ましく、それを参考にしして作る際の様式例などを示す資料集とセットのモデルを作りたい。</p> <p>○ これまで2回幼小接続期カリキュラム作成会議を開催しており、年度内には完成させ、各市町村・各教育委員会に配布したい。地域の実情もあるかと思うが、特定の小学校区単位で展開してもらいたいイメージ。県の委託事業でモデル地区を指定し、ここでまず実践経験を積んで、場合によっては作成したモデル例をアレンジ・マイナーチェンジし、知見を積み重ねながらいいものにできあがっていく、そんな展開を考えている。</p>
川島座長	<p>○ 各委員からの意見から分かりますとおり、現場はもう悩んでいる。大学で研究して、これから取り組んでいくというレベルではないことはお互い共有を図るべきかと思う。上位概念的なところよりも、現場はすごく忙しいので、マニュアル主義がいいとは思わないが、ある程度ガイドラインとなるマニュアルがないと忙しい現場では適応できないとの実情もある。誰もが同じ方向性を一旦は理解できるようなマニュアル的なものを早急に作り、かつそれが独りよがりにならないよう、委員会に諮り、それぞれの立場からの意見を吸い上げ、一刻も早く現場に戻していただきたい。</p>
高橋教育長	<p>○ 遠山委員からは塩竈市の大変いいモデルを示していただいたと思う。県としても接続期カリキュラムのモデル例を作りたいということで、現在検討作業を続けているので、できるだけ早く、来年度の推進連絡会議にはお示しして、それを現場で使えるような改善を重ねていく、そういった循環が必要と考えている。</p> <p>○ 情報交換についても、それぞれの立場でその必要性は感じつつも、校長や担当が替わると、在り方自体も変わってしまうとの御意見もあった。幼稚園等から小学校に上がっていく上で、よりよい成長をするために全体で情報共有することが重要であるとの認識のもとに、情報交換会をする。そういった趣旨を含め、県教育委員会としても、情報交換会の必要性について広く示していく必要があると改めて実感した。示し方を含めて更に検討し、一つの方向性を明示していきたい。</p> <p>○ 公立・私立、幼稚園・保育所などの違いで、それぞれ別々に窓口があって、気軽に相談できるというメリットもあるのかもしれないが、横のつながりが希薄になりがちな状況。早急に幼児教育の窓口の一元化に向け、取り組まなければならない。いつまでにできるかということは現時点でははっきりできないが、来年度の本会議では、ここまでできるようになりましたと言えるようにしたいと考えている。</p>